

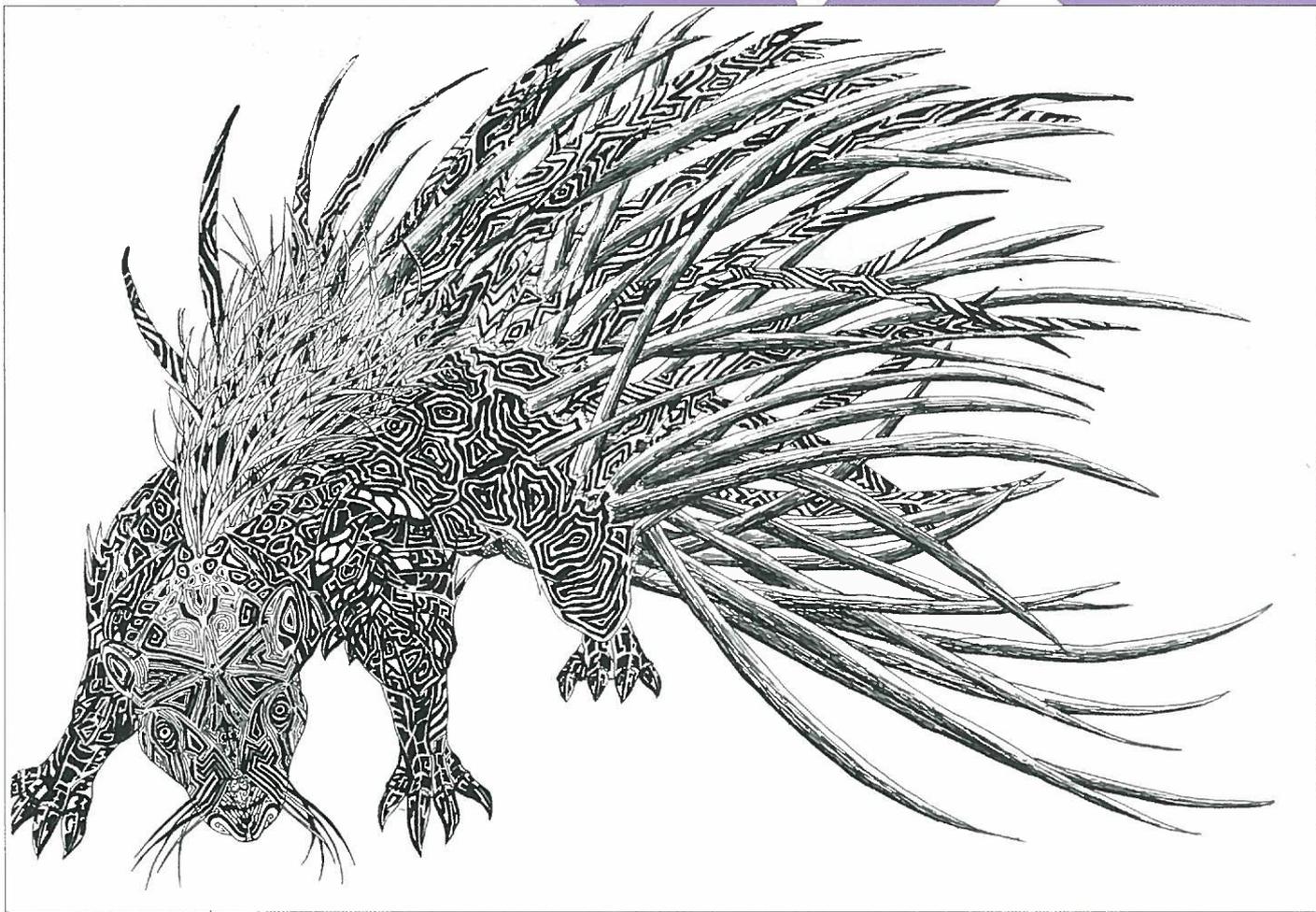
# 山口県教育

Education of the Yamaguchi prefecture

# 2

明日を拓く — 成果を検証する —

令和3年 No.1308



令和元年度 第72回山口県学校美術展 推奨作品  
『やまあらし』  
山口県立山口南総合支援学校 高等部3年生 (受賞時) かわの あまひつ 川野 瑛夫

## ■オンライン授業の始まりと展望

### ■小・中・高・大の連携

山口教育実践交流会 主宰  
至誠館大学

### ■やまぐちでの学びを生かす

山口大学大学院教育学研究科	教職実践高度化専攻教育実践開発コース	2年	竹内	萌茄
山口県立大学看護栄養学部栄養学科		4年	上田	結子
山口学芸大学教育学部教育学科		4年	長田	一菜
宇部フロンティア大学短期大学部保育学科		2年	岡田	華子

### ■現職研修助成事業

〈グループ研修〉

光市立岩田小学校  
宇部市立原小学校  
〈学校研修〉  
山口市立平川中学校  
岩国市立川上小学校

教諭	鎌田	潤一
教諭	大内	成二
教頭	藤田	猛
校長	松浦	孝和

### ■地域活性化活動助成事業

周南市立大河内小学校  
社会福祉法人華陽会

教頭	中村	元子
華陽保育園長	竹内	幹雄



### あなたのアクションは...

山口県教育会がすすめる  
「元気やまぐち」3つのアクション

- ◎あいさつ 返事で 明るいやまぐち
- ◎笑顔でつなく 安心やまぐち
- ◎ゴミ 落書きのない 美しいやまぐち

一般財団法人 山口県教育会

〒753-0072 山口市大手町2-18 TEL 083-922-0383 FAX 083-922-5768

URL <http://www.ykyoikuk.or.jp> E-mail [ykyoikuk@ruby.ocn.ne.jp](mailto:ykyoikuk@ruby.ocn.ne.jp)

明治36年4月第1号 毎月1日発行 発行人 会長：倉増誠彦／編集長：西岡 尚

# オンライン授業の始まりと展望

## アクティブラーニングによるオンライン学習



山口教育実践交流会 主宰  
至誠館大学 教授 西村 眞



「上を向いて歩こう」のモデルアクション

上を向いて歩こう 涙がこぼれないように  
思いだす 春の日 ひとりぼっちの夜  
上を向いて歩こう にじんだ星を数えて  
泣きながら歩いた ひとりぼっちの夜

「上を向いて歩こう」永六輔 作詞

昭和30年代多くの人が貧しかった頃、平成の東日本大震災の後、そして今、経験したことのないコロナ禍、いずれの時も苦しいことや辛いことが続いても前を向いて歩こうとした時、誰からともなく歌いだす歌詞の一曲である。私は小学生の時、紅白歌合戦でじつと聴いたことを覚えている。それから時を経て下関に赴任しているとき、隣の総合支援学校の学習発表会で子どもたちがグループでこの曲を手話を交えて歌っていた。生き生きとした子どもたちの表情やしぐさに心動かされるとともに指導した教員も一緒に手話を交えて歌っていたことを鮮明に記憶している。指導には多くの時間と苦労があったことは想像に難くないと思いつつ、いつの日か機会があればこの曲を活用したいと考えていた。

### 今、大学に求められているもの

今の本学に求められているものは時代を先取りした深い研究を始め、アクティブラーニングによる授業であり、それによるオンライン学習及び小・中・高や地域住民との連携による地域貢献活動である。

### ◆アクティブラーニングによる授業

今、大学では前期・後期とも15コマ（1コマ90分）の授業計画（シラバス）に沿って授業が展開されている。

できるだけ「教える」授業から「自ら学ぶ授業」への転換を図っているところである。2012年の中央教育審議会の答申では「生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力をもった人材を育成するために知識の伝達・注入の授業から学生が主体的に問題を発見し、解を見出していく能動的学習（アクティブラーニング）への転換が必要である」（要旨）と示されており、授業の質的転換を求めている。

### ◆オンライン授業の実施と課題

コロナ禍の中で、4月から多くの課題と向き合いながらオンライン授業を推進してきた。課題としては次のようなことである。

- ・情報活用能力としてのオンライン操作
- ・アクティブラーニングの観点の展開
- ・授業における教材の視覚化（見える化）
- ・対話的な学びや深い学び
- ・情報環境の整備 など

ここに掲げる課題を一つ一つクリアしながら進めていき、アクティブラーニングによるオンライン学習を展開した。「教育概論」において、「教職とは」から始まり、「アクティブラーニングの必要性を問う」授業へと発展させる予定であったが、途中オンラインでの展開を余儀なくされたことからこれまで温めてきた「上を向いて歩こう」をその導入とした。「手話を交えて動きを創ろう」と問いかけ主体的に学ぶとはどのようなことか考えてみようと思った。あなたならどのような動き（手話）にするか」という問いに、それぞれの想いを表現することにより30数人のイメージ動画が集まりライン画面が賑わいを見た。次は教師の



上を向いて歩こう

これから始まる小・中・高のオンライン授業への様々な支援等できることは協力していきたい。タブレット等の配布で加速的に推進されるところ。前述のモデルアクションの写真と動画のQRコードを貼り付けたので参照していただくと幸甚である。

デモンストレーションの動きを見て自分で工夫しながら修正して動きを創り上げていくという活動である。具体的には音楽（リズム）と手話と動きという3つの要素を取り入れることで自分の動きを考えてまとめ上げていくという活動となる。何名かのモデルアクションを動画にして市内の学校で総合的な学習の情報活用能力の向上を図る単元の授業として活用して頂けるよう、ダンスの得意な小学生のグループの動画を編集してみた。福祉施設等の訪問にも学生や中高生などのグループを組み活用を考えているが、コロナ禍で今は難しいがいつの日かできると思えば継続している。

### ◆オンライン授業（学習）のよさと今後の取組

今年4月の後半から6月の初旬まで5コマ分のオンライン授業を展開してきたが、実施してのよさや今後の取組の在り方は次のようである。

- ・一人一人と確実に繋がっているので対話的な学びが成立し、よく質問が出るしつぶやきも多い。表情の確認ができる。特に10人以下の少人数ではオンラインの方が話しやすい雰囲気になる。
- ・チャット機能を活用して画面に文字を入れて展開すると学びが意欲的になる。指を使ったグッドサイン等、伝え方に工夫が必要になってくる。
- ・ITリテラシーを育成し情報活用能力の向上を図ることが出来る。ズームやシスコ等のアプリの操作の機能を活用する能力やオンデマンドを駆使する能力が向上する。特に作成された動画をユーチューブやライン等で何度も再生して活用することが出来る。
- ・ライン上で共有した動画やプレゼンテーションは録画として保存していつでも活用することが出来る。
- ・レポート等を文章や図や写真等で構成して提出することで、情報の収集者としても発信者としてもその能力を向上させることができる。

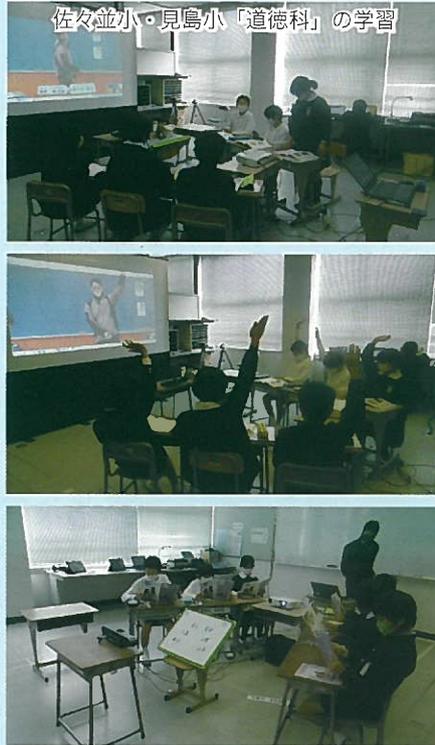
## 遠隔双方向授業（オンライン研修会）

市内の佐々並小学校では見島小学校と連携して遠隔によるオンライン授業を定期的に行っている。

この授業は佐々並小が5・6年生6名で見島小が6年生2名の「道徳」の授業である。この日は見島小の教員が全体を主導する形で展開されていたが、佐々並小の教員もほぼ同時に授業を展開していた。話し合いの場面ではお互いの意見を聞きながらノートに自分の意見をまとめて発表ができていた。最後はそれぞれの学校で教員が授業をまとめ子どもに評価させていた。

この相互遠隔授業を進めるにあたってはいくつかの課題をクリアしながら展開されていた。まず、情報環境である。お互いの板書が見えるような設定と子どもの声がよく聞き取れる集音器やオンラインできるコンピュータなどである。また、同じ教材を活用するため教員同士の打ち合わせも必要である。少人数とはいえ道徳科の授業には欠かせない子どもの考え方や傾向などをお互いが事前に把握しておく必要がある。

交流会ではこの参観をオンラインしてお互いの研修会を開催した。研修会開催までに動画の編集や写真の編集等かなり時間を要したことは言うまでもないが、充実した研修を行うことができた。



佐々並小・見島小「道徳科」の学習

山口教育実践交流会では小・中・高と連携して現在様々な活動を展開しており、オンライン研修会や小中高校生及び学生・市内教員・本学教員による総合的な体験学習を実施してきたので紹介する。遠隔双方向授業や中高のタブレットによるオンライン学習及び総合的な体験学習を詳述する。またこれからの計画や今後のオンライン学習のありかたについて考える。

## アクティブラーニングによる総合的な学習

自然体験と食をテーマに、小学生その保護者、教員志望の学生と本学関係職員及び会員（教員）などによる「ボンボラめし」づくりを本学の山手広場で開催した。

学生にとっては竹で炊き込みご飯を作るという活動は初めてであるが、計画段階から興味関心も高く能動的に活動することができた。小学生は教員と保護者も一緒なのでとても活動的で協力しておいしく作り上げることができた。

この活動は本学の広報担当の方が小学生とともに参加しているので、その感想と活動の様子を紹介する。また本学のホームページにも掲載している。

### 【子どもの感想】

竹の中にコメや具を入れて火をたいた。燃えないかと思ったが、とてもふつくとたけて驚いた。竹のお皿に入れて食べたが、とてもおいしかった。特に友だちと協力して火を燃やしたのが楽しかった。また、広い野外でとても天気がよくて友だちと一緒にだったので楽しい時間が過ごせた。次の七草がゆも楽しみです。

### 【保護者の感想】

大学のホームページ作成のため娘と一緒に参加して動画や写真を撮りながら活動した。友だちと一緒に娘の生き生きとした活動を見て、親としても楽しい時間を過ごすことができた。



「ボンボラめし」づくり

## 中高一貫校のタブレット端末によるオンライン授業



音楽科（高）

市内の中高一貫校（私立）では生徒一人一人にタブレットを提供して日常的に活用している。

大学ではスマートフォンやタブレットやノートパソコンなど様々な個別の対応が煩雑であるが、この学校では効率よく教師と繋がっていることが学習の効果を上げているようである。まず、家庭科では教員の提示した多くの教材から自分たちが実習で使用する教材をグループで話し合っ決めて、教員のタブレットに転送していた。教員は各グループの結果をプロジェクターに拡大して確認していた。

音楽科の授業では歌唱の評価の時間で各自が日本語とドイツ語の歌をピアノにあわせて4曲歌い、それをタブレットに録音して自分に一番評価できる曲を教員のタブレットに転送していた。

中学校の英語科では単語を組み合わせて文章を構成する活動で、タブレット端末上にペンで書いてその結果をデジタル黒板に転送して写し出し、話し合いをしていた。

高等学校の英語では教員が生徒のすべての活動をプロジェクターとタブレットを活用して英語の問いに英語で答え、タブレットに録音して発表するというレベルの高い授業を展開していた。



英語科（中）



家庭科（高）

## ふるさとでの決意



山口大学大学院教育学研究科  
教職実践高度化専攻教育実践開発コース  
2年 竹内 萌茄

私は、防府市で生まれ育ち、子どもの頃から教師を夢見てきました。私が住む地域ではお笑い講や三世交代交流会など地域の方と一緒に行う行事が数多くありました。地域の方々に見守られて育った私は、ふるさとへの愛着をもち、ぜひ山口県で教師になりたい。そう決心しました。

この夢を実現するため、大学では教育学部で家庭科を専攻して指導法などを学びつつ、山口市内の平川中学校や湯田中学校、上郷小学校で学習支援員として活動させていただきました。活動の中で印象に残っているのは、机間指導の時に聞いた「どこが分からないかわからない」という生徒の言葉、表情です。私は、このような生徒を一人でも減らしたいと思いました。そのためには、小学校での既習事項を十分に踏まえた指導をすることが重要と考えました。中学校教員として、小学校での学びを十分に生かした授業を考案したいと思っただけです。

教職大学院では2年間、防府市立右田中学校で実習を行いました。ここでは校内研修や学校運営協議会等、学部時代の教育実習では経験できなかった学びの場に数多く参加させていただきました。また、実地授業では、校長先生や大学の先生をはじめ数多くの先生方からご指導をいただき、

自分の授業を多角的に深く捉えることができず、自分なりに工夫して臨んだ授業では、生徒からとてもよい反応や発言を引き出すことができず、自分自身が少しずつ成長しているのが実感でき、教職への意欲がさらに高まりました。4月からは教員として、感謝の気持ちを持たず、これまでの学びや経験を十分に発揮し、微力ながら山口県教育に貢献していきたい。日々精進していきます。そのことが、地域の方々、ふるさと、お世話になった学校に対する恩返しにもなると信じています。



教育実習 中3 家庭科 「環境配慮の消費生活」

## 食育活動からの学び



山口県立大学看護栄養学部栄養学科  
4年 上田 結子

大学に入学して早くも4年が経とうとしています。私は食育活動を行いたいという思いで、本学の栄養学科に入学しました。課外活動やサークル活動を通して地域の子どもたちに対して食育を行い、仲間たちと一緒に多くの学びを得ることができました。中でも印象に残っていることは、変化する子どもたちの姿です。まず、課外活動では、高校生の頃から入りたかった「食育プログラム開発チーム 食育戦隊ゴハンジャー」に所属し、地域の子どもたちの心に届く食育活動を目指して活動を行ってきました。食育プログラムを行う中で、子どもたちから「ちゃんと好き嫌いせず食べるね」「作ってくれた人に感謝するね」などの生の声をたくさん聞くことができ、一度の活動でも食に関する興味関心を持つきっかけ作りになっていることを実感しました。

サークル活動では、地域の子どもたちと自然体験を行う団体に所属していました。田植えや芋掘り等を通して、子どもたちが食物を作る大変さや楽しさを感じる経験を積むことも、食育の一環であるということを実感しました。また、毎年夏に行われる、小学校5年生と中学生を対象とした1週間のキャンプでは、仲間たちと食事を囲むことで、子どもた

ちの仲が深まっていくことを目の当たりにし、共食の重要性を学びました。以上の経験から、食経験を通して、心が豊かになることを実感すると共に、家庭や地域、学校が連携し、継続的に食育を行う重要性にも気づくことができました。

私は、4月から山口県の高等学校で、家庭科の教員として働き始めます。大学や地域で学んだことを胸に、これからの未来を担う子どもたちが食の大切さに気づき、輝きながら生きていくきっかけを作ることができ存在になれるよう、私自身も生徒と一緒に学び続けていきたいです。



幼稚園児に箸の正しい使い方を指導

## 学びを繋ぐ



山口学芸大学教育学部教育学科  
4年 長田 一菜

私の大学生活は、毎日が学びで溢れています。大学の講義で教育の理論を学び、同じく教員を志す仲間と講義と講義の間に語り合う。そんな学びに溢れた毎日が「教師としての私」を形作っていることを、日々実感しています。

このような充実した大学生活の中でも、特に、私に大きな学びを与えてくれたのは、ボランティア活動で出会った子どもたちです。

私は大学でボランティアサークルに所属し、4年間でたくさんの子どもと関わるボランティア活動に取り組んできました。中でも力を入れて取り組んでいた活動は「放課後子ども居場所づくり活動」です。この活動は、一人親家庭や不登校の児童生徒などを対象に、放課後、学習支援や食事提供を行うものです。そこで私は多くの子どもたちに出会いました。中には、複雑な家庭の事情を抱え、心を開くことに時間のかかる子どももいました。それでも、根気強く話かけ、一緒に遊ぶ中で関係を築くことで、子どもたちの笑顔を見ることができた時には、この場所がその子にとつての居場所になったんだと、温かい気持ちになりました。そして、本や講義では学ぶことのできない子どもたちの成長や発達の様子を見取ることができただけでなく、私自身の未熟さを子



教育実習 小6 算数科「比例と反比例」

どもたちが気づかせてくれたことで、教育者として成長できたかけがえのない経験となりました。

このボランティアでの学びが小学校や特別支援学校での教育実習に活き、さらなる自身の成長に繋がったと実感しています。

私は、これまで出会ってきた子どもたちが私にくれたたくさんの学びを、これから教育現場で出会う子どもたちの成長に活かし、繋げていきたいと思っています。山口県の未来を担う子どもたちの豊かな成長を支えていくことのできる存在になるために、今後も日々邁進していく所存です。

## 笑顔を広げる保育者として



宇部フロンティア大学短期大学部保育学科  
2年 岡田 華子

私は、保育園に通っていた頃、お世話になった先生に憧れたことがきっかけで、保育者をめざしています。子どもたちがふとした瞬間に見せる様々な表情が好きで、一緒に楽しみながら成長できる、そんな保育者になりたいと、日々努力をしています。

保育学科での講義を通して学んだ理論を、実習などの実践の場で生かしていけるよう心がけてきました。実習では、子どもたちと関わる中で多くの経験を積むことができました。また、設定保育では、子どもの対応がうまくできず、苦戦することもありました。しかし、失敗を繰り返しながらも、現場の保育者の力を借りて納得いくまで挑戦し、自分の中で成功体験を重ねることができました。そのことから、失敗を恐れずに挑戦することが、自分の力へとつながっていると感じてきました。同時に何度も挑戦することで、試行錯誤することの大切さも知りました。実習中、子どもたちの笑顔や元気な姿に救われ、改めて子どもが好きだということを感じました。

私は、ゼミ活動にも力を入れていきます。一人で子どもの前で発表したり、グループで作品を演じたりと、様々な経験を積みました。どんなことをしたら子どもたちが喜んでくれるのか、仲間と考えながら話し合い



模擬保育風景

を重ねました。協調性や、アイデアを形にしていく力が必要となり、制作を進める中で様々な壁に突き当たったこともありました。しかし、子どもたちの前で実際に演じるたびに、笑顔を見ることができ達成感を感じることができました。

この度、宇部市役所の採用試験に合格し、4月から宇部市内の公立保育所で勤務することが決まりました。今まで感じたことや経験してきたことは、私の中で大きな力となっています。学びや経験を生かし、子どもたちの笑顔を広げられるような保育者になりたいと思います。

## グループ研修

### 自由な雰囲気の研修会をめざして



光市立岩田小学校  
教諭 鎌田 潤一

山口大学教育学部附属光小学校の在職時に、理科室が改修され明るい雰囲気になった。当時の副校長から「何かやったらどう」と言われたのが『理科授業づくりの会』立ち上げのきっかけである。やまぐち総合教育支援センターでの長期研修で、研究指導主事の講座の様子を見ていたので、会のイメージはできていた。また、山口大学教育学部ちやぶ台理科ネットとの共催や、山口県教育委員会の後援により、予算や広報の面での支援を受けることができた。

このような背景の下、附属光小で同じ理科部の先生と、4年間で計23回の会を開催し、延べ349名の教員や大学生とともに理科や他教科の授業づくりについて語り合った。開催を知らせるちらしに載せていたフレーズが、「アイデアは、自由な雰囲気の中から生まれます」である。

附属光小を出た後も、規模は小さいながら活動を続けている。前任校の下松小では、他にも自主研修会を主催する教員がいて、若手・中堅教員の研

修意欲の高まりを感じていた。

本校着任時は、臨時休業の真っ只中であつた。子どもたちの学びを継続させるため、昨年度末から『1分間実験動画シリーズ』を作成し、インターネット上で公開していたので、本校職員にも動画作成に参加してもらい、動画教材づくりに関心をもってもらおう機会となるよう心掛けた。学校再開後も、本校では遠隔授業やタブレット端末の活用等、新しい取組を実践している最中で、ここでも研修意欲の高まりを感じている。

4年前、松山市立子規記念博物館で『俳句革新記念子規庵句会写生図』を見たとき、「これだ!」と思った。20数名の門人が輪になって俳句を作っている。隣と語り合う者、飲み食いをする者、寝そべって筆を執る者等様々で、奥では肘掛けに寄り掛かった子規が微笑んでいる。このような自由な雰囲気の研修会を今後めざしていきたい。



こうすることで、  
気体検知管の中を空気が通り  
中の薬品が反応します

本校職員が参加した実験動画

## グループ研修

### 「たい」のある授業・生活を創る



宇部市立原小学校  
教諭 大内 成二

コロナ禍における今年度は学校の教育活動に多くの制約がかかり、授業も生活も「～ねばならぬ」が多かった。これまで以上に大人に管理され、多くの我慢を強いられてきた子どもたち。そんな子どもたちを前に、ふと本校の研究テーマ「『たい』のある授業・生活を創る」が目にとまった。自分の授業づくりでは、「やってみたい」「考えてみたい」など、子どもの内面に目を向けているだろうか。自分の学級経営では「取り組んでみたい」「成長したい」と子どもたちが思える手立てを講じているだろうか。本稿では、そう考えながら取り組んだ2つの実践を紹介しようと思う。

一つ目は、道徳科の教材「手品師（A正直、誠実）」での実践。深める場面を「手品師が男の子を選んだ基準は何か」の1つに焦点化することで、話し合う時間を十分に確保し、意見を板書として整理するを通して、多角的・多面的に捉えられるようにした。また、子どもたちの話をつなぐことで、友だちの話をもっと聞きたい、自分との違い

を知りたいと思う子どもが増えていった。同時に、教師が授業でねらいとする価値について、子どもたちと同じような1人の参加者として一緒に考えていくというスタンスで授業を進めていくことで、自分たちで教材の価値を見つけよりよい自分を目指していこうという意欲を継続させることができた。

二つ目は、これまで以上に重視した自問清掃の実践。自問掃除は「がまん玉」「親切玉」「みつげ玉」の3つの玉を磨くために行う掃除で一番の目的は自分の心を磨くこと。15分間に、時間いっぱい自分の心と向き合い、自分自身を見つめながら掃除をする。掃除の後にある3分間の振り返りの時間では、「自分は会議室の掃除で、先生たちもあまり来ないから手を抜こうとする自分がいる。でも、誰にも見られていないからこそ、自分の心磨きのために取り組める自分になりたい」などの言葉がノートに記されていた。



道徳科 意見を整理した板書



自問清掃

## 学校研修

### 夢・目標の実現に向けた主体的な取組へ ～新型コロナウイルスを学びの起爆剤に～



山口市立平川中学校  
教頭 藤田 猛

4月15日、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、再び臨時休業へ突入した。生徒も教員も、これから学校はどうなっていくのかと不安になった。そこで、これから“コロナ”の影響を受けながら行われるだろう学校教育の中で、授業や行事での生徒の学びをどうするのか、行動が制限され欲求が満たされない精神的な苦痛をどう和らげるのか、休業中に職員会議を重ね協議した。そこで、コロナを題材にした授業を臨時休業明けすぐに行うことと、臨時休業中に授業動画を撮影・配信していくことにした。

#### 1 コロナを題材に学習しよう

各教科・領域の特性を生かした“コロナ”に関する授業を教科等横断的な視点で考え、次のような授業を行った。

- ・道徳科「コロナウイルスについて考えよう」
- ・学級活動「コロナに関するアウトプット」
- ・保健体育科「予防策の体験」

- ・社会科「感染症の歴史」
- ・数学科「増加のしくみ」
- ・英語科「A L Tによる世界のコロナ事情」

#### 2 授業動画を撮影・配信しよう

休校中の学習教材としてだけでなく、通常の授業でも活用できるようなコンテンツとなるものを企画した。現在、次のような授業動画が9教科17本、本校HPにパスワードをかけて、公開中である。助成を活用して撮影設備を整え、今後も授業動画を増やしていく予定である。

- ・英語科「LとRの発音」
- ・理科科「ガスバーナーの使い方」
- ・保健体育科「体育祭準備体操ラベンダー体操」

このように“コロナ”を題材に学習を深めることができれば、現在の困難な期間が、生徒にとって残念なものから学びの多いものになるのではないかと、この逆転の発想によって、生徒が明るい未来への夢や目標を抱く土台ができると期待している。



## 学校研修

### 様々な人やものとの関わりを通して 主体的に学ぶ力を高める授業づくり



岩国市立川上小学校  
校長 松浦 孝和

本校は、豊かな自然と歴史と文化薫る学習環境に恵まれた、全校児童12名（二十四の瞳）の小規模校です。児童は、純朴で人に対する優しさや温かさがある反面、自分から進んで活動に取り組んだり、相手とコミュニケーションを取りながら活動に取り組んだりすることは得意とはいえません。

そこで、地域のよさ（人やもの）を生かした場（授業や体験活動）を設定し、その中で交わり関わり合いながら学習活動に取り組むことをとおして、主体的に学ぶ力を高めていくために3つの視点を定めて研究主題に迫っていくことにしました。

一つ目の視点は、「人・もの・ことの適切・効果的な活用」です。まず、「川上学」というカリキュラムを編成しました。川上の自然や歴史、文化について実地調査を行ったり、地域の方に指導者になっていただいたりして、授業だけでなく学校行事等をおして川上地域について学んでいくというものです。

3・4年生の総合的な学習「川上水族館を作ろう」では、魚を網でつかまえたり、釣ったりしました。それを飼育・観察する水族館を教室に作り、タブレットを使って調べ、発表することで、地域の人・も

のに関わりながら表現する力を養っていきました。

二つ目の視点は、「主体的に学びに向かうための授業形態」です。これには、地域の方に授業に入ってもらったり、ICT機器の活用や共学びのルールづくりに取り組んだりしました。1年生の授業では、自分の考えを地域の方に説明したり、逆に質問されたことに答えたりすることで、双方向のコミュニケーション能力と表現力を高めていきました。

また、5・6年生は、間接指導時（教師が他学年を指導時）にグループでの話し合いをリードする立場を交代しながら、友だちの考えを引き出したりまとめたりすることで、主体的に学ぶ力を高めていきました。

三つ目の視点は、「考えを表現するための方法及び評価」です。基本となる作文力は、朝学習の「短作文」で取り組ませるとともに、発達段階に応じた評価基準を作成し、基礎スキルの定着と向上に取り組んでいます。

考えを表現する方法については、新聞形式やブック形式でまとめさせたり、ICT機器を使用してプレゼン形式で発表させたりするなど多様な方法で相手に伝える（伝わる）力を身に付けさせているところです。

このような取組をおして、主体的に「気付き・考え・行動」できる川上っ子の「二十四の瞳」が、輝きを増していつてくれることを願っています。



## 大河内美しい学び舎プラン



周南市立大河内小学校  
教頭 中村 元子

大河内小学校は、周囲をぐるりと緑に囲まれた、広い敷地を持つ学校である。運動会の時には運動場で競技をしつつもなお駐車場がとれる程スペースに余裕があり、赴任1年目には驚いたものである。校庭には多くの花壇と広い畑が点在し、春の桜に秋の銀杏、どんぐりの木に梅の木まで、四季折々の木が揃っている。この素晴らしい環境をさらに明るく、児童にとって過ごしやすいものにするためにはどうしたらよいか考え、学校運営協議会やPTAと手を取り合って「大河内小の美しい学び舎プラン」を発足することとした。

### 1 校舎前の柘植の木の伐採・整備

校舎前の長い花壇には、老木となって立ち枯れている柘植の木があった。児童の通り道のため、四季を感じることができ、元気が出る花壇にしたいと考えた。そこで、昨年度からPTA執行部や学校運営協議会委員、職員が協力して木の伐採・整備を行った。きれいになった花壇は学年花壇や学校運営協議会花壇として四季折々の花を植え、学

校を訪れた方々の目を楽しませるようにした。

### 2 校門前の花壇の整備

一方、校門前の花壇は学校に入っすぐの、目につくところであるが、木の太い根が這い、土壌改良の難しい花壇であった。この花壇をどうにかしたいと頭をひねっていた。そこで、明るい色の煉瓦を並べ、古いヨーロッパの石畳のような煉瓦を敷き詰めることで校門付近が華やかになって明るい印象になり、雑草も生えにくくなると思いついた。煉瓦を敷く作業は5年の児童が率先して行ってくれた。今は、校門に設置するチャレンジ目標を掲示した看板を作成中である。

今回の取組により、校門前は明るく美しい印象となり、校舎前には美しい花々が咲き誇ることとなった。PTA、学校運営協議会、小学校のそれぞれが手を組み、実際に行動に移すことで、さらに「大河内に大河内小あり」と言えるような美しい学校になることを心から願っている。



校門前の花壇の整備 (5年生)

## かよう 華陽ハッピーロード花づくり活動



社会福祉法人華陽会  
華陽保育園長 竹内 幹雄

華陽保育園は、防府市田島に位置し、30名のスタッフが乳幼児114名(12/1現在)を保育している。

当園では、未来を生き抜くために『質実剛健』を重んじ、子どもたちが豊かな体験を通して、生きる喜びを分かち合うことを理想に掲げている。その基底では、①「安全・安心が最優先」の保育に全員が徹し、②保護者のよりよい子育てをフォローし続ける、を大切にしている。本年度は全職員が教育会の新会員となり、研究助成を申請した。



4月、道路に面する園舎北側に、渡り蝶アサギマダラが飛来するフジバカマを植えた。すると、10月中旬子どもの「チョウがきたよ」の声。

また、9月は年長さんとルピナスの種を植える。すぐに発芽し、「手みたいな葉っぱがでてきたよ」。それから子どもたちは苗に付きっ切り。

秋が深まると、『かようハッピーロード』の看板

をさくら組さんが作った。それを見た方が、「素晴らしい事業からの助成があり、良かったですね」「一つ一つのパネルに子どもたちの笑顔が詰まっていますね」「地域活性化への大きな発信ですね」等の感想。

11月、山口県観光大使マウンテンマウスのまあいさんがハッピーロードの落ち葉を見て「子どもの記念日」を作曲。

心理カウンセラー阿波ひろみさんから一言、「道行く人たちがこの看板を見てはニッコリ😊。笑顔が咲くハッピーロードですね」。

最後に、コロナ禍の中で社会を支えるエッセンシャルワーカーとして再認識された保育士さんとともに、子どもたちの花づくりを通して、さらに地域との絆を深め、広げていきたい。



ハッピーロードの落ち葉



さくら組さんとルピナスの苗